

広島爆心地からの思い

賈 晶淳

私自身が今、関心を持っているテーマのひとつは「近現代史における人間性の問題」である。それは、具体的に言えば近代における戦争体制や植民地支配を通して表わされた人間性の問題である。勿論、それらは過去に止まっているものではなく、現在も自分をはじめ多くの人々の中に面々と流れているものと思っている。そういった関心から、去年は百人町教会の方々と松代大本營の跡と沖縄のスタディツアーを、今年は広島への一人旅が出来た。

今回の広島の旅は年の始め頃から、原爆の日が入っている八月中に行ってみたいかと漠然と思っていたところ、広島に単身赴任しておられる友人のお陰で、旨くその日にあたる六日にあわせて訪ねることが出来た。この旅に出かける前に、いつものように幾つかの文章を読んだ。そのうち、井上ひさしの『父と暮らせば』を家庭集会の読書会で読み、自分が以前から思っていた、「聖書は今も書き続けられている」という考えを井上氏も広島への思いを語る中で持っているのに驚き、又嬉しかった。

8月6日は朝からものすごく暑い日であった。午前中は「広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式」の式典に参加した。広島市長の恒例の「平和宣言」の中で、「戦争のできる、『普通の国』にしないことが日本国政府の役割である」といった言葉が心に響いた。是非、日本という国の特殊性を守ってほしいと思った。午後は平和大通りや平和記念公園を見下ろせる比治山公園へ登った。その一番高い場所に1947年にアメリカによって設立された「放射線影響研究所」があった。今は日米共同の研究所になっている被爆者研究施設である。丁度、その日が年一度だけのオープンハウスの日に当たり、友人と中に入って見た。建物の玄関先には大きな日米の旗が掲げられていた。幸いにも友人の友人がその研究所に勤めており、案内して頂くことも出来た。その方は統計医学者であった。そのことが意味するのはその研究所の主な働きが被爆者の治療のための研究ではなく、被爆者への放射線影響の統計、例えば、かかった病気や死ぬまでの期間等の研究をしているということであった。今は被爆者2世の方も対象になることが多いという話も聞いた。今でも重い被爆症状を抱えながら苦しみの中で生きている人が大勢いることと、片方、被爆者でありながら国家という枠によって排除され、被爆後何の手当ても受けないまま日々苦しみの中で生きている、海外居住の元広島住民がいるのも見落としてはいけない。あの原爆投下の事件は半世紀を過ぎて未だに終わっていないのである。

57年前の原爆投下の事件を何故今も重視しなければならないのか。多くの日本人はその事件を被害という立場から考えている。確かに、被害者という立場はものも言いやすい。しかし、自分を始め、多くのアジアの人々は、原爆を落としたアメリカの論理とほぼ同じ思いを長い間、持ち続けて来たのである。それによってあの戦争が終わり、戦争の仕掛け国として当然受けるべき結果であったとのことである。この二つの立場の間には大きなギャップがある。今回の旅を通して強く感じたのは、あの事件はこの世で起こってはならない事件であったことであった。人間は造ってはならないものを造り、使ってはならないのに使ってしまったのである。そしてそれをどのような形でも正当化するのは間違いであるのも分かった。自分のこれまでの愚痴も少しながら認めることが出来た。

その上、二度とあのような事件を起こさせないためには何をすればいいのだろうか。21世紀における広島爆心地の意味するのは何だろう。物事が起きるのには何か原因があるはずである。爆心地からその原因を正しく見極め、謙虚に認めることも大切なことであろうあのアメリカの9・11事件もあってはならない事件であった。多くの人々が犠牲になった。しかし、その事件の裏にもそこまで至らざるを得なかった原因なるものがあった。それをあえて言えば、侵略や抑圧、それによる多くの犠牲者の出現であったことであろう。それは宗教やイデオロギー、善と悪の問題ではない。犠牲者の叫びである。その声を聞かなければならない。戦時中その声をいち早く聞きとめ、受け入れていたら、あのような犠牲は出なかつたらう。その意味でアメリカは今、大きな間違いを犯しているのだ。爆心地は侵略と抑圧がない世界への起点にならなければならない。(第154号・2002.12.15.)